

水資源・環境学会 2025 年度研究大会
報告要旨

【報告】

③ 小規模水道にみる水の代替不可能性—ヴァナキュラーな水の価値

報告者：野田岳仁(法政大学)

本報告の目的は、小規模水道を維持する村落が何ゆえに他の水道システムによる代替を拒むのか、その理由を明らかにすることである。本報告では、行政による上水道が導入されているにもかかわらず、村落単位で小規模水道を運営する新潟県大毎集落と岐阜県大湫集落を取りあげる。大毎集落は大正時代から 100 年間小規模水道が維持されてきた。大湫集落では、リニア中央新幹線のトンネル掘削により地下水脈が損なわれ、小規模水道や井戸が枯渇したことに対し、JR 側からは新たな水源の提供や無償のウォーターサーバー等の代替策が提示されているが、その反応は好ましいものではない。なぜ人びとは一見非合理的にもみえる対応をするのであろうか。ミネラルウォーターが売られ、上水道が整備された現代社会において、水は商品であり、上水道はサービスとして存在している。ともすれば、水は代替可能な資源と考えがちであるが、村落にとって水は代替可能なものではなく、固有な価値を持っている。本報告では、水は飲料水のように単なる資源としての供給にとどまらず、村落自治に深く根ざした「ヴァナキュラーな価値」を有する存在であることを示す。

【講師プロフィール】

法政大学現代福祉学部・大学院人間社会研究科准教授。早稲田大学大学院博士課程修了。博士(人間科学)。専門は環境社会学・地域社会学・観光社会学。国内外の水場を歩き、ゆたかな暮らしを営む人びとの創造性に学びながら、水とコミュニティの社会学を構想している。環境省や内閣官房、地方自治体の各種委員・アドバイザーを務め、井戸端再生によるコミュニティづくりの提言・伴走支援に取り組む。単著に『井戸端からはじまる地域再生—暮らしから考える防災と観光』(筑波書房)。連載にミツカン水の文化センター機関誌『水の文化』がある。法政大学ソーシャルイノベーションセンター長。